

第9期県民生活審議会第1回総合政策部会（概要）

1. 日 時 平成24年3月15日（木）14：00～16：00
2. 場 所 パレス神戸大会議室
3. 出席者 委員：鳥越会長、加藤部会長、浅倉委員、井原委員、大前委員、木田委員、北野委員、小西委員、佐藤委員、田端委員、野崎委員、速水委員、山口委員、山下委員、山本委員
県側：高井政策監、梅谷県民文化局長、川村県民生活課長、竹村協働推進室長、宮崎副課長、森田主幹、有吉補佐、永園係長、県民局ほか関係職員

4. 内 容

(1) 政策監挨拶

- ・ 最近、おやじの会や引きこもりのお子さんを支援する方の会合に出席し、強い信念を持って行うコアとなる人の存在と、周りから支える支援者の存在、つながりの広がりがある課題でも欠かせない部分だと実感した。
- ・ 第8期の審議会では、社会的孤立を未然に防ぐ地域づくりをどうするか、について審議頂き、課題に応じてフレキシブルに、テーマに応じてそれぞれの力を発揮するやり方を「緩やかな」と表現し、理念を示していただいた。今期は、つながりの再構築という方向性を進め、具体的にどんな形とするかを県民のみなさまにどう示すかが大きなテーマ。
- ・ テーマごと、課題ごとに整理しないと、一つのまとまった答えは出ないかと思っているが、色々な角度からの忌憚ないご意見をお願いしたい。

(2) 資料説明について

- ・ 事務局から資料1～4に基づき説明

(加藤部会長)

- ・ 昨年8月に全体会が開催されたが、今期は新たな諮問を受けず、新しい地域のつながりの有り様を第8期からの議論を踏まえて具体化することが課題。
- ・ 事務局で現地調査を踏まえた実例の資料を用意しているので、具体的なイメージを持ちながら、どのように進めていくかを議論したい。
- ・ 資料1の4つの事例について、それぞれ課題もあったかと思うが、その辺りをご紹介頂きたい。

(事務局)

- ・ 彩雲の事例では活動が長くなってくると、地域のことを大事にしたいという思いをメンバー内で共有することが難しくなってきたことが課題。
- ・ 小野の事例ではみんなが集える場づくりの取組が島根では成功したが、地域特性もあり、同じやり方は小野では通用しない面があることが課題。
- ・ 網干の事例では、NPOというハコが先に出来てしまったので、中身の充実が今

後の課題。人材育成は目星を付けてもう既に育成中。

- ・ 家島の事例ではある程度活動してくるとモチベーションが低下してくるので、モチベーション維持とマンネリ化を防ぐことが課題。

(3) 意見交換等

<第9期のテーマ、議論の進め方>

- ・ この会議で何を議論し、何を成果とするかをもう一度共通理解しなければならない。
- ・ 今回の資料の様な事例は、東播磨の地域でも活動しているような事例。第9期になって今さらこれらが全県で実施されるようにしないといけないのか。孤立死などが増えている中、地域がものを売る、特定の人が集まって地域を活性化させるというような悠長な話では無い。
→今回の資料は従来の組織だけでは解決出来ない課題に対して、上手くいった事例をケースごとにいくつか出したもの。これを兵庫県的全集落でやろうというものではない。ある課題に、時にはこんなやり方がそれなりに機能した、というものをまとめた処方箋のようなものを作りたいというのが今回お願いしている趣旨。(事務局)
- ・ 孤独死などが発生し、戦々恐々と生活している中、まちの活性化どころではない。タイトルの「家族を中心に」は良いが、その他のところは、今日のテーマとして取り上げる事ではない。
- ・ 社会的孤立に対して、地域は何が出来るかが、そもそも第8期の出発点なので、目指すところは委員と同じ。色々な例示を出しているが、これをメインテーマにするつもりはない。活動を長続きさせるにはコミュニティビジネスみたいなものもあるという事例。(事務局)
- ・ どのように人と付き合い、まちづくりするかということを議論する会議だと期待して今日は来ているのに、漫然と今までと同じような議論では困る。
- ・ 人間関係の希薄化や孤立死の問題に地域として何が出来るかという時に、例えば民生委員のなり手がなくなったのは、なぜか、こういう問題を誰が、どこが、受け止めて議論していくかという見極めが大事。
- ・ 事例自体はどこでも使える話ではないが、こういう事例があり、こういう成功要因がある、ということを出せば、処方箋としては有効である。そのためには「こういう議論の延長にあって、こういう形のものを最終的に目指している」ということを総合政策部会として共有しておくことが必要。
- ・ 第9期は第8期を踏まえた上で広く考えて欲しいという話で、大変討議がしにくいですが、逆に考えれば自由を与えられているので、諮問に対しての答申、ということを超えたことを言えるチャンスと考えればよい。私たちが言わなければならないと考えていることを言えばいいのではないかと思う。
- ・ 孤立等の様々な問題は、特定の部局が格闘しているのを評価した上で、県政全体

として各部局の動きをサポート出来る方針を打ち出すことが期待されている。そのため一方で隔靴搔痒の感がある。

- ・ 県民交流広場は自治会的発想でもNPO的発想でもない第3の発想の側面を持っていた。県民交流広場は小学校区単位にしてきたが、それがいつまでも良いかはわからない。県民交流広場を一つの良いヒントとして、その問題点を拾いながら、どんな地域組織を作ればよいか、この1年間審議すべき事ではないか。
- ・ 今までのつながりではカバーしきれなくなった社会をどうするか前期も議論してきたが、事例や広場のような芽がたくさん地域の中で生まれていることをどう活かしていくか考えるべき。
- ・ 何が深刻な課題でどうアタックするかをクリアにする必要がある。
- ・ どういう地域社会、家族、人間関係を目指すかを第8期に議論したはずなのに、共有されていない。我々がどういうものを目指すのかを具体化する作業を一方でしながら、そのゴールに対してこういう事例はこういう手段としてつながっていく、というシナリオが出来ないかと思う。
- ・ 方向性を示すのは事務局の役割ではなく、この部会の役割で、部会が何を課題として考えているのかを答えれば、事務局が出来る範囲で事例を集めてくることは出来る。
- ・ 自助、共助、公助を誰が担うのかが混同している。部会として公は何が出来るかを議論しなければならない。
- ・ 共助と自助をどう組み合わせ、疲弊する制度をどうにかしなければならないところはある。
- ・ 地域、家族のニーズを把握し、それに合わせて資源を組み合わせ、ニーズが社会的に難しいものなら、教育でニーズ自体を変えていく、というプロセスをたどる必要がある。そこに政策がどう関わっていくかはこれから整理していかなければならない。その中でも、今一番弱いところをやらなければならないのが皆の思いだと思う。
- ・ 私が意図したのは、課題やニーズを無視した議論というのではなく、個別の課題を解決する政策というのはこの審議会の議論ではないだろうということ。こういう風な地域社会、こういう組織がある地域、こういう人間関係があるよう地域社会を目指してはどうか、という程度のものを共有しながら、そこに至るツールとして、事例を使っていく形の議論にしてはどうかという提案である。

<資料のまとめ方の視点>

- ・ 今日のテーマである地域のつながり形成と資料のコミュニティビジネスの事例が繋がっていない。網干の事例以外は、地域から何となく浮いてしまっている形になっているのではないか。こういう事例を採り上げるのが良いのか。
 - 資料1の事例は基本的には地域の方々でされているものなので、地域から浮いているということはヒアリングで受けた感じはなかった。資料の方で

お示しにくい形になっていて申し訳ない。(事務局)

- ・ 今回の論点が事例の中でぼやけてしまっている。
- ・ 調査しているのは活動が出来ている事例のような気がするので、出来ていないところを調査して欲しい。
- ・ 今回の資料は、8期の答申を具体化する、実質化するという事で作られているが、それを最初に共有する説明があればわかりやすかった。
- ・ 今回の事例が処方箋だと言われると抵抗がある。こういう取組をしてこういう変化を起こしています、だから良いんです、という形の紹介をして頂けると面白い。
- ・ 事例についてなぜここを選んだかという説明がなかった。
- ・ 事例にあるような新しい形のものが出来たことによって、地域にどのような変化を起こしたのかという視点から、社会的孤立に陥りがちな方達がどのようにつながりが持て、社会がそのような方達を支える側をもう一歩外側から支えられる仕組みになっているかを示すとわかり易いのでは。そうすることで、NPO等が地域特性に合わせ、どういう活動を展開し、課題解決しているかの手がかりが得られ、そこから議論が展開出来るのではないか。
- ・ 家族と地域のつながり、地域と個人のつながりは相反したり、連動したりするものなので、エコマップ（事務局注：支援を必要とする人やその家族の人間関係やさまざまな社会資源の状況を、一見して理解できるように、図式化し描き出した地図のようなものこと）のようなものを作ってまとめていけばわかりやすいのではないか。
- ・ 事例について現状の課題や活動内容はわかるが、何が原因でこのような活動が起こり、なぜこの人が出てきたか、ということをはっきりさせる必要がある。また、誰がどう繋がっているかという相関図のようなもの、どういう人がどうつながって、何で出来たのかということがわかると議論しやすい。
- ・ 事例に関しては、つながりがテーマなので、防災などつながらなければならない事例に限定して集めてはどうか。

<家族制度、家庭の変容、地域の変容>

- ・ 孤独死の事例を見て、私の地域では隣の人の方が大事だと意識改革している。今が周囲との付き合い方や生活を切り替える意識改革のチャンスである。
- ・ 主婦のバレーボールチームを作り、姑さんの文句、愚痴を言う場にもしてもらっていた。それは成功したが、一方で長幼序列が崩れ、親の地位の低下を招いた。
- ・ 50～60歳までの人で、親に育ててもらった恩を感じている人は少ない。家庭内で弱い立場のものが、仕事を持ってお金を得るようになって、立場が逆転しており、家族制度が崩壊している。
- ・ ここは家庭の細かな問題を検討する審議会ではないが、事例から、NPO等の活動が家族のこういう側面で役に立つ、という読み込み方も出来る。その上で、こういう活動は家族にとってプラスになるので意図的に配慮する、などの提案をす

ることが出来る。

- ・物事には長所と短所があるので、家制度にもママさんバレーにも一つの役割があることは確か。家や家族が抱える問題に対して、地域社会がどう対応出来るかを考えた時、事例から読み取れることがある。読み取ったことをどう評価するかは意見があると思うが、私は評価する。
- ・家族といっても、血縁でない家族、家族のような形態のものまであり得る。色々な家族の形態の変貌まで考慮に入れずに簡単に家族とは言えない。
- ・今回、深刻な課題に対して絆とか連携などが効率的であるということで、その事例が示された。これだけではなく、家族の多様化、変貌する家族など社会システムの変動も考えなければならない。
- ・自由の追求は個人的には良いものかもしれないが、周りに与える影響もある。自由だけではなく、制限とか義務とか強制というものも同時に必要ということを受け入れる必要がある。
- ・家族以上の付き合いの近隣もいるとは思いますが、まず家族血族の形でなければ、きちんとした核が持てない。
- ・公の時代ではないので、それぞれが責任を持ち、みんな意識改革をして、高齢者の世話や子孫の継続に取り組んでいかなければならない。
- ・中山間地域は、生活課題をそこに住んでいる住民達で解決出来なくなってきたおり、今のような生活を継続し、終わっていきたいと考えても、支えられなくなってきた。

<コミュニティの範囲、単位>

- ・過去にも行政の都合でコミュニティが分断された事例がある。何でも小学校区単位でコミュニティとしているが、本当に現実とあっているかを議論する必要がある。
- ・地域という言葉をよく使うが、小学校区単位か中学校区なのかまち全体かを議論すべきではないか。
- ・地域についても、小学校区だけではなく色々なものがあり得る。
- ・水利権があるところはコミュニティが強い。生活とコミュニティ、生業とコミュニティがしっかり結びつき、ルールが守られ、地域が創られている。また神様の存在が地域の合意形成のシンボルでもあったりする。こうした原点に戻ってどんな形で単位を作るか議論すべき。

<つながり形成の方策、施策の方向>

- ・みんな組織と組織をつなごうとするが、組織をつなぐことは難しい。まずは個人がつながり、それぞれが引きずっている組織同士がどこかで繋がるという取組が良い。
- ・個人は活動を持っており、組織は体制を持っている。地域の課題が複雑になり、

見えにくくなっているので体制から考えるのは難しい。出来ることからやるという、活動から入らないと見えないこともある。個人の視点から個人の活動を結びつける施策が、これまでの組織を結びつける施策と両方あればよい。

- 今の時代、つながらなくてもいいと思っている人に繋がるのが大事と説得するためには、繋がるための何かがあれば繋がらない。
- 地域社会の緩やかな連帯という意味は全ての組織が肩を組むことを意味していない。組織と組織が重なり、10と10が25になることがある。そういう組織体を作っておくことが大切。
- 例えば福祉のソーシャルワーカーに関しても、つながりを作っていく時に、家族の問題に入っていくながら、地域と関わっていける多様な人材がいないと難しい。今後は人材を作っていかなければならない。
- 先進事例から読み込んでいくことが大事。今回はコミュニティビジネス的な事例が出ているが、こういう小さな地域循環を起こしながら課題解決する手法は、現在効果的で広がってきている手法である。
- つながると言ってもテーマが要る。そのテーマを整理し、絞っていくことが必要。
- これまで子どもや高齢者という弱者を支えようと頑張ってきたが、母の介護体験を通じて、母を支えるために、私を支えて欲しいとも思うことがあった。「支える人を支える」ということが必要で、考えていかなければならないことだと思う。
- 個人や家族を超えた家族的な関係を作っていくことは非常に難しい。そこに暮らす人たちが生活課題を認識し、どういうつながりを作りたいか、どういう方向に向かっていくかということ、最重要事項として考えることが必要。
- 儒教家族圏では、つながって孤立死しないようにしよう、ではなくて、つながること自体が生きることで幸せ。この辺りは学んでいくべき事である。
- 皆さんの意見を聞いていて思うのは、私たちが考えるべきは「支える人を支える」地域組織。今、そのテーマで進もうということではないが、私たちが課題と考えていることは何かを議論していく中で明らかにしていく必要がある。
- ボランティアでは限界があるが、お金を出すととっても、行政もお金がなく、地域の理解が得られるかも疑問。この度の寄付税制の変更で、状況が変わることが期待される。
- 日本では行政組織がしっかりしているので、制度化されたシステムに押し込もうとして矛盾が生じる。今回の事例の中にも行政マンが地域に入っていくというのがあったが、このあたりにも解決のヒントがあると思う。

<過去の県生審等の議論について>

- 20年前の委員会の時に、神戸市だけがゴミの分別をしないで、他の地域が分別するとなったとき、「人口が多いところは分別せずに埋め立てた方が経済効率が良い」と言われた方に「環境をお金で買わないといけない時代にそんなこと言っていてはいけない」と発言した。

- ・ 震災後のまちづくりの議論では、新しいまちの話が中心だったが、それもしようがないと思いつつ、同じような考え方は普通の地元では通用しないと言いつけてきた。

<地域特性の違い>

- ・ まちづくり協議会などは協議会によって差があり、活発なところとそうでないところがある。そういうことも踏まえてまとめて頂きたい。
- ・ 地域によって地域の構成が違う。同じ事をしてても駄目なので、どういう施策展開がよいかは第8期に引き続き考えなければならない。

(4) 高井政策監挨拶

- ・ ビジョン審議会では一般論として望ましい社会を書いている。実情はテーマごとに違うので、この審議会では、自助、公助、共助の中で、共助のこの部分が弱いというところの事例を掘り起こし、どう改善したか、何が役に立ったかを抽出することが必要。
- ・ その上で、それらが普遍化出来れば良いし、テーマごとに違うので普遍化出来ないとなれば、それぞれでまとめて、次回の資料としたい。
- ・ 資料が出来たら、再度お集まり頂きたいと思うので、引き続き活発な意見をよろしくお願ひしたい。